

風から水へ——ある小出版社の三十五年
目次

第I部 学生時代とその前後

- 1 前口上 2
- 2 笠井潔と文芸部を 3
- 3 横浜の田舎者 6
- 4 高校時代の読書と詩の時代 9
- 5 政治の季節と吉本隆明 10
- 6 大学に入り、「臭いメシ」を食う 12
- 7 学生運動からの離脱と同人誌活動 23
- 8 フランス文学を学ぶ 49
- 9 天沢退二郎と宮川淳 51
- 10 修士論文 61
- 11 フランス現代文学・思想の研究動向 63

第II部 出版界へ

- 12 出版界で働くキツカケ／『幻想と怪奇』 70
- 13 “*même/borges*”を刊行する 82
- 14 国書刊行会で働く 93
- 15 造本、装幀について 102
- 16 三人の先輩編集者／宮下和夫さんのこと

17 中野幹隆さんのこと 123

18 安原顕さんのこと 131

第Ⅲ部 創業する

19 創業する 156

20 初期の出版物 166

21 白馬書房の買収 169

22 取次正味問題 174

23 最初の経営危機 187

24 第二、第三……の経営危機 201

25 O紙店のこと 207

26 『彷彿月刊』のこと 224

第Ⅳ部 水声社の現状

27 水声社への「復帰」 238

28 経営の「理念」(?)/編集方針 244

29 年間の売上高 249

30 取次店(書店)ルートの販売高 251

31 再販制と定価販売 259

32 出版助成金 265

33	著者による買取り	268
34	学会での売れ行き／図書館の書籍購入状況	269
35	広告・宣伝のこと	272
36	純売上高推移グラフ／新刊企画収支見込表	274
37	製作原価①（紙・印刷・製本費用）	283
38	製作原価②（印税・原稿料）	285
39	製作原価③（翻訳版權料）	292
40	製作原価④（装幀料）	294
41	税務署との（トラブル）	297
42	製作原価⑤（編集人件費・制作人件費）	303
43	製作原価⑥（一般管理費）	310
44	在庫	312
45	借入金	326
	【資料】	
	設立趣意書	334
	書肆風の薔薇／水声社 刊行書目一覧（1982～2016年）	338

風から水へ——ある小出版社の三十五年

インタビュー／小田光雄

第I部 学生時代とその前後

1 前口上

鈴木さんとは国書刊行会時代から知り合っていますけど、今日は鈴木さんが横浜出身であることから、その文化というのかモダニズムというのか、そういった環境、雰囲気の中で、どう成長してきたのかをお聞きしようと思ってきました。

うーん、どうでしょうか。外から見たときの横浜のイメージというものはあるのでしょうか、横浜に特別な文化みたいなものがあるのかどうか……

最初からそういわれてしまうと、予定していたイントロダクションの構成がくるってしまうので、少し聞いてくれませんか。

まず私の友人に横浜の連中がいて、彼らは他と異なると、つばい、感じがあり、映画だったら日活アクション系、グループサウンズでいうとゴールデン・カップスだった。生島治郎が高校の先輩にあたり、それから早いうちに矢作俊彦のことを評価していた。彼らは鈴木さんより少し年下だけど、同じ高校です。こんなことをいったのは、ぜひ鈴木さんにも「告白」してもらいたいからです。

鈴木さんは、横浜の高校の時に笠井潔と文芸部をやっていたわけですよ。鈴木さんはそのことをあまり話していないみたいだけど、笠井がデビューした頃に私にそういつていた。自分は部長で、一応、卒業もしたけど、笠井は根っからの反逆児みたいところがあって、中退してしまったと。

2 笠井潔と文芸部を

そんなことを小田さんに話しましたっけ。よく覚えていますね。小田さんにそういうことを話したというのは、もう忘れていましたけれども、たしかにわれわれの高校には文芸部があつて、一学年下でしたが、笠井もいました。小田さんにそういうことを話したのだとしたら、それはたぶん、四十年くらい前のことではないかと思いますが、たぶんうれしかったからではないでしょうか。自分の出身高校の後輩が小説家（彼がそのころ書いていたのはミステリー仕立てのものだったと思いますが）としてデビューした、そのことがうれしかったからじゃないでしょうか。われわれの高校の文芸部の先輩には、青木雨彦（エッセイスト）とか宮原昭夫（芥川賞作家）といった文人（？）もいるらしいのですが、私の年代の前後、数年間ということだと、笠井以外に小説家らしい小説家はいません（小田さんが今、名前を挙げた生島治郎もわれわれの高校の先輩ですが、文芸部にいたのかどうかは分かりません）。売れない「同人誌作家」はいるのかもしれませんが、そこまでは分かりません。

まあ、ただ「うれしい」という程度ならどうということもないのですが、そのうちに、あの小説家は私と同じ高校の出身である、そして私と同じ文芸部の出身である、ゆえに私はあの小説家の「親友」である、となつてゆくわけです。いわゆる「同窓会意識」です。三島由紀夫が死んだときに、「おれは三島の親友だ」というひとがたくさん現れましたけど、あれと同じです。

私が小田さんに、「おれは笠井の親友だ」というふうに言っていないことを、もし言ったのだとした

ら、小田さんが（武士の情けで）そのことを忘れてくださることを祈るばかりです。笠井とはただ単に、同じ高校の、同じ文芸部に、それもごく短期間いた、というだけのことです。高校卒業後も、一度か二度、会っただけです。

笠井は中退しましたが、同じ文芸部で「めでたく」卒業した組には、藤田豊君（彼は中学時代からの友人で、某大手化学メーカーで液晶の研究・開発に携わった後、定年退職し、今はわれわれの会社の役員をひきうけてくれています）、N・Y君（彼は弁護士になり、創業以来、われわれの会社の顧問弁護士をやってくれています。ボランティアみたいなのですが）などがいました。それから、先輩にも後輩にも、「文学好き」がたくさんいました。文芸部ですから、当然といえば当然ですが。

なぜ笠井のことを話してもらおうと思ったかという点、彼の兄貴のほうを知っているからです。亡くなってしまいました。笠井雅洋といって中央公論社の編集者で、私が出会った時には、『マリ・クレール』の編集部にいました。ペンネームは矢代梓で、ペンヤミンの、岩波書店版の『パサージュ論』の刊行以前に、その読書会を呼び掛け、その翻訳にも終始立ち会っていた。

私も笠井の兄さんの方とも面識はありました。彼はたしか横浜市大の出身で、会うとよく、「きみはおれの弟と同じ高校だったらしいけど、弟をデビューさせてやったのは実はおれなんだ。なかなかたいていへんだっただよ……」という意味のことを言っていました。もちろん本当かどうかは分かりません。でも、弟に頼まれれば（頼まれなくとも）、自分が勤めている会社はともかくとしても、知り合いの編集者とか出版社を紹介するくらいのは普通するのではないのでしょうか。それ以上のことを彼がしたのかどうか、そのへんのは分かりませんが、もちろん尋ねてもいいですけど……。

宮川淳先生（宮川先生のことは、あとで話します）が亡くなってすぐに、中央公論社から、阿部良雄さんの尽力で、宮川先生の『美術史とその言説』という本がでたのですが（この本は、その後まもなく絶版になってしまったので、われわれの会社が復刊しました）、この本の編集担当者が彼でした。小田さんの言うように、彼はドイツ系の哲学・思想のようなものに関心がある人で、宮川先生にそれほど興味があるようにはみえませんでしたので、たぶん阿部さんとの関係で担当することになったのだと思います。そんなこんなで、彼と知り合ったのではなかったかと思えます。あるいは、彼の同僚というか、先輩編集者だった安原顕さん（安原さんのことも、あとで話します）に紹介されたんだったかもしれないですね。そのへんの記憶は曖昧です。もっとも、彼とも親しかったというわけではありません。誰それの出版記念会とかどこぞのパーティとかを別にすれば、せいぜい二、三回しか会ってませんからね……

私の横浜出身の友人たち、鈴木さん、笠井兄弟に加えて、今泉正光さん、私が聞き手になって、この本と同じ版元、論創社からでている《出版人に聞く》シリーズの最初の本（『今泉棚』とリプロの時代）の著者ですが、彼もたしか、七〇年代半ばにはキティランドの横浜関内店にいた。

そうでしたね。私が今泉さんと知り合ったのはやはりその頃、七〇年代の半ばころだったと思います。かけだしの編集者だったころには、そして当然ですが、自分で出版社をはじめてからも、いろいろな新刊書店のスタッフのひとたちと知り合いました。今泉さん以外にも、高田馬場の芳林堂からリプロへ移った中村文孝さん（そういえば彼の本『リプロが本屋であったころ』も、《出版人に聞く》シリーズででていますね）、東京堂の林健二さん、三省堂をやめて古書店の麗文堂をはじめた小林俊矢さん……名前をあげるときりがありませんが……。

あとがき

本書の版元の森下紀夫さんと旧知の小田光雄さんに、本をつくりませんかと声をかけてもらってから、何年になるだろうか。逡巡する私を森下さんが叱咤激励し、小田さんに聞き手になってもらって話をしてからでも、四、五年はたつ。

そして、その間にも、出版界には、戦後最大といってもいいような大嵐が吹き荒れていた。電子書籍の登場、グーグルによる無断スキャン問題、アマゾンの再販破り、大阪屋の経営危機、栗田・太洋社の破綻……そのつど、現場の人間として対応に追われ、そしてそのつど、この本の校正刷りに赤字を入れた。赤字を入れはじめると、あそこもここもと、赤字は増えつづけ、加筆に加筆を重ねることになってしまった。そんなことをしているうちに（無論、それだけではなく、私の生来の怠惰故というのが事実に近いのだが）、数年が過ぎてしまった。その間、かくも辛抱強くお待ちいただいた森下さん、小田さんには、感謝の言葉もない。あとはただ、この本がすこしでも「売れる」（はずもないわけだが）ことを望むばかりである。

私としては、日本の小出版社の現状に関心を寄せる人々に向けて、そうした人々の役に多少なりとも立つようなことを、多少なりとも役に立つようなかたちで話し書いたつもりなのだが、考えてみれば

ば、今、そうした人々はいったいどのくらいいるのだろうか。一九七〇年前後のことだが、今はなき『日本読書新聞』の編集部員一名募集に、先輩編集者のO・Yさんによれば——彼自身も応募したらしいので、確かだと思う——、何と、千人以上の応募者があった、われわれの学生時代はそういう時代だった。そうした「神話時代」から歴史時代へと下った現在、小出版社などというものに興味をもつ人間の数は激減しているように思われる。「現状報告」のつもりで話し書いたこの本は、結果としては、「挽歌」、滅びゆく小出版の世界への挽歌ということになるのかも知れない。

それはともかく、いずれにしろ、書物というものは、書き終えられた瞬間から、著者や出版者の手を離れ、自身の生を生き始めるものらしい。私としては、この本が、できることならば、「幸福な」生(?)を全うする(?)ことを願うばかりである。

本文中ではご存命の方々についても言及しているが、遠い記憶を掘り起こしつつ話し書いたことなので、必ずしも正確ではないかも知れない。あらかじめ、ご海容を請う次第である。また、学生時代の恩師の先生方は、当然のことだが、「先生」と呼ばせていただいているが、それ以外の方々の場合は、原則として、「さん」で呼ばせていただいた。日頃おつきあいでいただいている著者、訳者の方々に聞しても、ふだんは仕事から、「先生」と呼ばせていただくのを旨としているが、今回は「さん」とさせていただいている。日頃の呼び方のままだと、「先生」だらけの本になってしまう、一般の読者の方々は無用の混乱、誤解をよびおこしかねないことを恐れた故であり、他意はない。学生時代の友人等、一部は「君」で呼ばせていただいたり、敬称なしになっていたりしているが、学生時代以来の習慣のな

せるわざであり、こちらも他意はない。

最初に書いた通り、本書がこのようなかたちでできあがったのは、ひとえに森下さんと、私のつたない話におつきあいいただいた小田さんの徳懃と激励による。もう一度、感謝を。また、装幀をひきうけてくれたブック・デザイナーの宗利淳一さんにも感謝申し上げます。最後に、私の存在そのものを支えてくれている妻の栄美子と息子の洵にも、感謝を。

二〇一七年三月

鈴木宏

鈴木 宏（すずき・ひろし）

1947年、宮城県涌谷町に生まれる。神奈川県立横浜翠嵐高校から東京都立大学に学ぶ。同大学大学院修士課程（仏語仏文学専攻）修了。1981年に〈書肆風の薔薇〉を創業し、以後、〈水声社〉と社名変更後も同社の経営にあたる。

「ボルヘスときみ」（『地下演劇』第13号、1979年2月）、「映画についての／のための断章——寺山修司の思い出に」（『夜想』第16号、1985年4月）などのエッセイのほか、最近うけたインタビューに、「『読む』ことは考えること」（『リア』第32号、2014年8月、聞き手＝高橋綾子）などがある。

風から水へ——ある小出版社の三十五年

2017年6月20日 初版第1刷印刷

2017年6月25日 初版第1刷発行

著 者 鈴木 宏

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル（〒101-0051）

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

インタビュー／小田光雄 装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1597-8 ©2017 Suzuki Hiroshi, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。